

「ん……」

リタが目を覚ます。
手を動かそうとするが、肉の壁に
埋め込まれているらしくピクリともしない。



肉の繭とでも表現するべきだろうか。
正面だけは開いているが、そこには相変わらず
変わり果てた姿のセリカが
歪んだ笑みを浮かべて佇んでいた。

「おはよう、リタ♡」

インフェスターの手に堕ちたセリカに
捕らえられてからどれほどの時間が経ったのか。

セリカやインフェスターの触手に
代わる代わる犯される毎日は確実にリタの心を
消耗させていった。

脱出は不可能、穴と言う穴を犯され
得体の知れない体液によって常に疼く身体。



いつからか、臍の穴からはインフェスターの核に
似た赤色が覗いており、もはや助けが
来たとしても元には戻れないという絶望が
少しずつ心を蝕んでいく。

「……今度は何をするつもりですか」

「あれ、無駄に抵抗する気も失せちゃった？」

「でも安心して？ こんな風にするのは
これが最後だから♡」



「……？」

最後と言っても解放するつもりなんて無いだろう
嫌な予感が沸き上がる。

「ふふっ、今リタが居るのはご主人様が

リタの為に作ってくれたとっておきの浸蝕器官」

「リタの事も私の時みたいにする

洗脳しちゃうのは簡単だったんだけど……」

「ご主人様はこれが出るのを待ってたの、
おかげで私もリタで沢山楽しめたけど♡」



「せん…ぱい…?」

セリカが何を言っているのか理解できない、
したくない。

「い、いや……嫌っ！」

「もう、急に元気になっちゃって……」

「どういう目に合うのか想像しちゃった？」

「でも大丈夫……すぐに『気持ちいい』と

『幸せ』って感覚だけになるし……」



「リタは私よりも、よりご主人様に近い存在になれるの、とっっても光栄なことなんだよ？」

「ふふ……ご主人様……お願いします、」

「リタも私のように……♡」

恍惚とした表情で呟いたセリカに
肉蕨が蠢き、触手がリタの身体を這いまわる。

「んっ……ひう……っ」

もはや全身が性感帯のように敏感に
なってしまうたリタの身体は
ただそれだけで過剰に反応し、逃げ場のない
快感で身体を跳ねさせる。



「ひっ……そ、それは……」

そして……股間の下、花卉のような形状の肉腫に鎮座するひとときわ太い触手が、リタの秘所へと狙いを定め動き出す。



「そ、そんな大きいのも無理っ
そんなのっ……私……壊れっ……!」

「あっ……ぐっ……ひあああああっ♡」

挿入されただけで絶頂を迎え、ビクビクと
痙攣するリタの身体。

「あっ んおっ、奥までっ

おっ……あああああっ♡♡」

そんなリタはお構いなく、触手は
開発されきった膣道をかき分け、植え付けた
種を芽生えさせるべく子宮へと到達する。



「ッ♡♡♡」

微細な触手が子宮へと根を張り、挿入された太い触手の本体はリタの身体を変質させる精を子宮へと容赦なく注いでいく。

そして、溢れた精液を滴らせ痙攣し続けるリタの身体へと、新たな触手が伸びる。



「んえっ……む、むねえ……？」

「ひあっ♡」



膨らんだコブと、その先に枝分かれした先端を持つ触手。

その先端がリタの痛いほど勃起した乳首を包み込み、同時に乳房へと侵食する。

「う……これ、は……」

「ふふっ、リタ、おっぱいが小さいの
気にしてたよね？」

「よかったね、ご主人様が大きくしてくれるって♡」

「う、うそ……おっ おおっ♡」

膣だけでなく、子宮までを犯し、浸蝕する触手。

内側から灼けるように熱くなる胸。

全身くまなく快楽で蹂躪され、リタの理性は
もはや風前の灯火だった。

そこへ……。



「あっ……………」

細い触手が何本もリタの耳穴へと挿入され、
唯一難を逃れていた脳をもつい犯し、冒し始める。

「ついにリタも

ご主人様に洗脳してもらえるんだね♡」

「そうやって頭の中書き換え
られて……………私みたいに人間やめちやお？」

「あっ ああ……………いや……………あっ♡」

リタの口から洩れる声から嫌悪の感情が消え、
歓喜と悦楽で満たされる。



「あああああああああ♡♡♡♡♡」

「おっ♡ んおおおおおおおっ♡♡♡♡♡」

「あっ♡ ああっ♡♡」

「♡♡♡♡♡」





容赦ない徹底的な凌辱と洗脳……
既にギリギリの状態だったリタの
身体と精神に耐えられるはずもなく。
その表情は快楽に歪み、その臍からは
ついにインフエスターの核そのものが覗いている。

「はい、ご主人様。もうリタはご主人様の
寵愛を受け入れる準備が出来ているかと……」

「ふふ……♡ いよいよだね、リタ♡」

「おっ……んお……?」

与えられる快楽と洗脳に溺れていたリタは、
ふいにセリカからかけられた声に
不思議そうに反応を返す。



「これからリタは

この浸蝕器官の中で生まれ変わるの」

「今よりも私と同じご主人様の僕…」

ううん、眷属として相応しい存在に♡」

「せんぱいと……おなじい……えへえ……♡」

緩み切った表情で笑うリタを確認した
セリカが距離を置くと、浸蝕器官の肉繭が
徐々にその口を閉じていく。

「あ……や、やだ……せんぱ……」

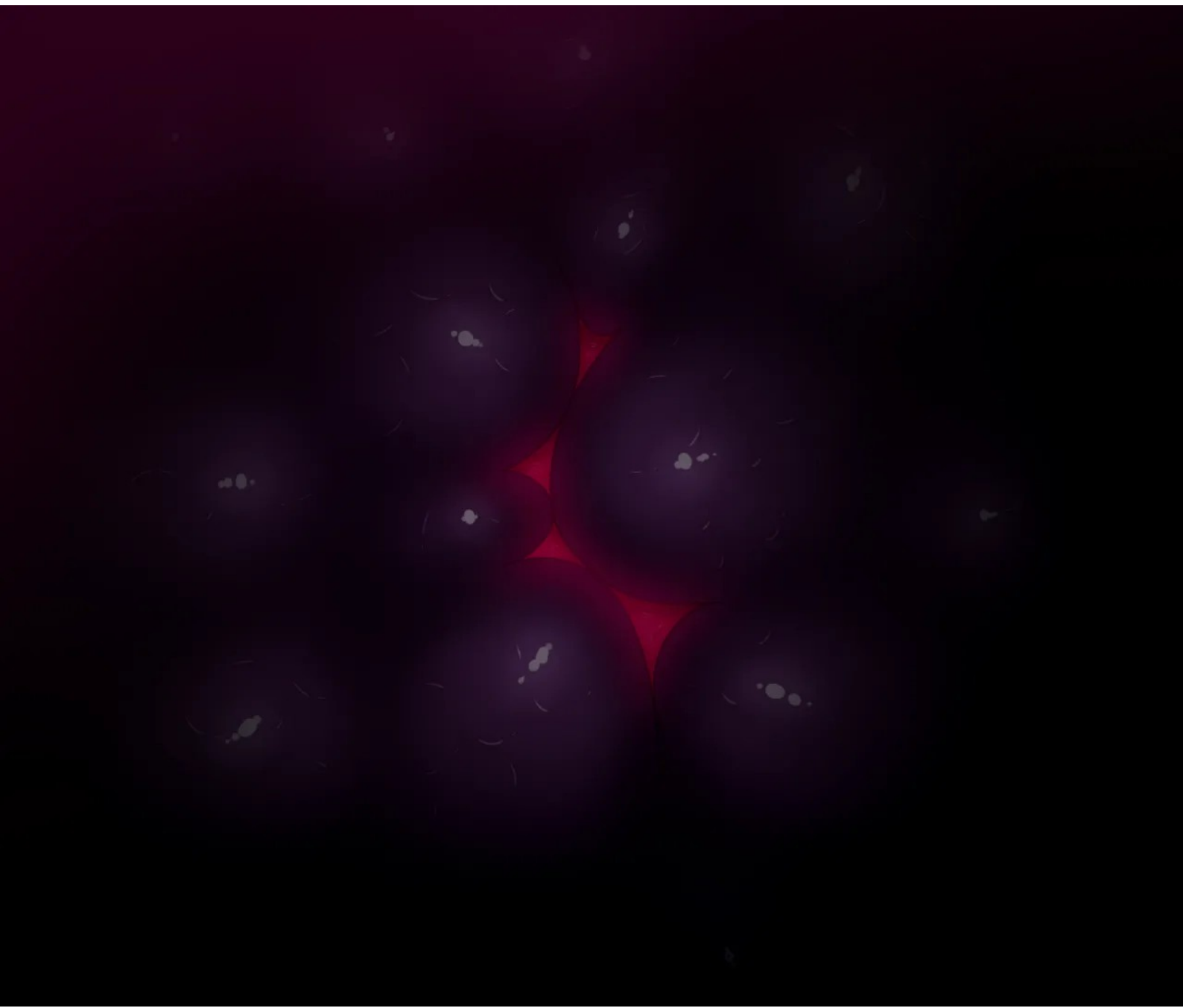


「ツ」

「ツツツ」

リタの姿が見えなくなると、その奥からはくごもった悲鳴と触手の蠢く音が響く。

「リタ……これで次に会う時はまた一緒だね」





いつからか肉繭の中から悲鳴が聞こえなくなり、
心臓の脈拍のようなドクン、ドクンという
音だけが断続的に響く。

そして肉蕪が再び開き、
その中身が露わになった時……

新たなるインフェスターの眷属が
この世に生まれ落ちる。



「ん……はああああ……」

変わり果てた姿のリタが深く息を吸い込む。

インフェスターの体液とリタの汗や愛液とが混ざり合った、人間が嗅げば思わず顔を背けたくなるような濃厚な淫臭。

それを思いつきり肺へと取り込むだけで子宮がきゅんと疼き、股からは蜜が溢れる。



生まれ変わった身体を馴染ませるようによじる。

セリカと同じように、しかし洗練された形状となった皮膚と触手が張り付いた、淫靡に彩られた身体。

乳房は元の倍以上に肥大化し、体内から表出したインフエスターの核と、それと同じ色に染まった瞳と髪。

臀部からは尾のような触手が垂れ、下腹部には主の所有物であることを主張する淫紋が輝く。



「気分はどう？ リタ」

「あっ……先輩！ はい！最高です♡」



セリカへと、とびきりの歪んだ笑顔を向ける。

「先輩のおかげで、私もご主人様の眷属へと生まれ変わる事が出来ました！」

「ふふっ、よかった♡」

「さあ、生まれ変わったばかりで疼くでしょ？」

「それに……その身体なら、人間だった
時なんかよりもずっと気持ちよくなれる♡」



「あっ……♡」

もっと、気持ちよく。

快楽への欲求だけが心を埋め尽くしていく。

「ああ……ご主人様……
今までの私が愚かでした……」

「これからはご主人様の繁栄の為だけに
この身を尽くします！」

「ご主人様がお望みなら

人間だって沢山殺します！」

「だから……だからお願いします！」

「もっと私のナカにご主人様をくださいっ！」



「あっ……♡ ああああああっ♡♡♡」

「♡主人様♡♡ ごしゅじんしゃま♡♡♡」



「♡♡……幸せだよね、リタ♡」

「おっ……♡ おおっ♡ んおおおっ♡♡♡」

「この世界にもう人間なんかの居場所は無いの」



「だから、ご主人様に利用価値を見出して
いただいた私達はとても幸福な存在……」

「これからは一緒に

ご主人様の為に生きていこうね……♡」



































